

『プレゼント』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



この原稿を書いているクリスマスの季節にちなんで、今回のテーマは「プレゼント」。

90代のSさんは、今では地域経済を支える産業となったホタテ養殖を豊浦町に初めて導入された方。パイオニアの苦労は少なからずあったはず。私が初めてお目にかかった時、Sさんは無機質な病室のベッドに横たわり、鎮静薬の持続点滴を受けほとんど意識のない状態で、沢山の管につながれたまま人生の幕を下ろそうとしていました。病室での呼びかけには何の反応もありません。まだ話せる頃は、「家に連れて帰ってくれ！」と死力を尽くして訴え続けた父親の最後の望みを叶え上げたいと思った子どもたちの願いに、その要請に応えて奔走した地元の訪問看護師の熱意が加わって、遂に自宅への退院が実現しました。Sさんにとって、ホタテ養殖事業を手掛けてこれを成し遂げ得たことは、人生の大きな誇りだったのでしょう。念願叶って自宅に帰った日、まだ薬の影響で朦朧状態でしたが、「Sさんがこの町で最初にホタテ養殖を始められたのですか」の問いには、しっかりと頷き返してくれました。その後Sさんは、海辺の我が家にいる安心感に包まれて約一週間を過ごされました。不本意な病室に閉じ込められ管につながれた患者としてではなく、今や重要な地場産業となった事業の創始者として、尊敬できる父親、夫として、「顔」のある存在として、誇り高くその生涯を閉じられました。

Nさんは80代の女性で、娘が2人います。昇圧剤を使ってかろうじて延命されているNさんの病室を初めて訪れた時、Nさんは間もなく訪れる自らの死を虚ろな表情でただ待っている人のようでした。そもそも入院自体がNさんの意に反するものであり、また入院中にさまざまな予期せぬ出来事があったりもして、娘たちには、この病室で母親の人生を終わらせたくないという強い思いがありました。しかし、私は退院を諦めるよう勧めました。「家という場所よりも娘たちがそばにいてくれることが、お母さんにとって大事ではないでしょうか。お母さんを今この状態で家に連れ帰ってもかえって移動の苦しみを味わわせてしまうだけかもしれません。家への道中で息を引き取る可能性もあります。家に帰ったこと自体わからないかもしれません。この状態では最後までここで見てあげるのがいいのではないのでしょうか。」Nさんの状態を考えた上での苦渋の選択でした。私のこの言葉を聞いた直後、顔を伏せ静かに涙を流される次女さんの姿を見て、私の心は揺れました。次女さんは経験豊かな医師でもあり、もはや医療は母親に対して有益なこと

は何もできないことはよくわかっていました。また何よりも母親本人が家での自然な最期を

望んでいたにも関わらず、自分たちが結果的にそれを邪魔する形になってしまっていることに、娘たちは心を痛めていました。二転三転した長い話し合いの末、最終的には、推定されるNさん本人の願いを汲んで、翌日の退院が決定しました。その時点で既に夕方5時を過ぎていましたので、退院調整看護師が大急ぎで調整し（後日、私がNさんの最期の様子を伝えるに伺った際、この心優しい看護師が涙をこぼしながら言うには、「家族と先生との話し合いを横で聞きながら、何とかしてNさんを家に帰らせてあげて！と私は祈っていました」、翌日の午前中に退院する運びとなりました。退院に当たっては、娘たちの希望に添う形で、昇圧剤を含む点滴の類はすべて外されました。Nさんのご自宅は人里離れた山中深い場所にあります。退院当日、こんなところに人家があるんだろうかと不安を感じつつ雪道を進んでいくと、果たして、ぼつんと一つだけ家明かりが見えました。既に周囲は闇に包まれています。退院から7時間程が経過していましたが、Nさんはかろうじて小さな命の火を灯し続けてくれていました。それどころか、Nさんは私の呼びかけに笑顔をを見せてくれたのです。病室で見た「顔」のない患者とは明らかに異なっているNさんの表情でした。ベッドに横たわっているNさんの視線の先には、懐かしい写真の数々が飾られています。ふっくらした昔のNさんが今は亡き夫と旅行した時の写真。二人の娘たちがまだ少女だった頃の写真。思い出の写真を見せながら娘たちは色んなことをお母さんに話しかけていたようです。Nさんの右手を長女が、左手を次女が、優しく包み込むように握り、慕わしい母親との別れを惜しむ中、Nさんが命の火を燃やし尽くしたのはちょうど日付が変わる頃でした。僅か半日ほどでしたが、それはどれほど貴く濃密な時間だったことでしょうか。惚れ惚れするような美しいNさんの死に顔でした。

英語のpresentという単語には、「今ここにいる、ある、存在している」という意味があります。Sさん、Nさんが、「顔」のある存在として、愛する人たちに囲まれて今ここに存在しているということは、ご家族にとって何物にも代え難いプレゼントでした。ご本人たちにとっても、そこにいられることは何よりのプレゼントでした。望んだ場所で、お互いを大切と思い合う人たちと一緒に、今ここに存在が与えられているということ自体が、かけがえのないプレゼントなのです。